

# アミーゴ会だより

2012年 1月  
(メルマガを改題)  
No. 9: 2012 - I



発行人：上原尚剛  
編集人：河嶋正之  
          鴻巣勝明  
事務局：関口重雄

## 新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会  
会長 上原尚剛



皆様明けましておめでとうございます。ご一家お揃いで良いお正月をお迎えの事とお慶び申し上げます。

昨年は東日本大震災により発生した未曾有の大津波に襲われ、福島原子力発電所の事故も重なって、未だに多くの方が厳しい冬の中で不自由な避難生活を送られて居る事に心が痛みます。改めて心からお見舞い申し上げます。

また昨年は、わが国以外でもニュージーランドの大地震や地球温暖化の所為でしょうかタイやヨーロッパでの大洪水など、自然災害が各地で発生して大きな被害をもたらしましたが、本年はそうした災害の無い平穏な年になることを祈るばかりです。

さて、7年の長きに亘り駐日大使を務められ両国の親善に尽くされたミゲル・ルイス・カバーニャス大使が昨年7月に離日され、新たにクロド・ヘレル (Claude Heller) 新大使が9月に着任されました。新大使は大変気さくな方で、11月に行われたアミーゴ会の恒例の懇親会にもご夫妻でご出席され会員の皆様とも親しく懇談されて居られました。今後のご活躍を大いに期待したいと思います。



昨年もアミーゴ会は「アミーゴ会だより」を4回発行して会員の皆様に色々な情報を提供すると共に、歴史文化講演会も4回開催しましたし、7月には横浜で行われたアレグリア・デ・メヒコを後援、9月にはお台場でのフィエスタ・メヒカーナにも参加するなどの活動を行って参りました。一方、ゴルフ会は御宿にアミーゴ会が設立されたのを記念して御宿の会員の皆さんとの懇親ゴルフ会を予定していましたが、震災の影響を考慮し残念ながら中止せざるを得ませんでした。

震災の影響が各方面に広がる中、例年実施していますリセオ(日墨学院メキシココース)の学生を会員の家庭に受け入れるホームステイも、昨年は日本への旅行が取り止めになった為実施出来ませんでした。

今年も「アミーゴ会だより」の発行はもとより、文化歴史講演会を初め機会を捉えて会員同志の親睦とメキシコとの友好増進に繋がる各種催しへの後援や参加を考えておりますが、皆様からのご要望もございましたら実現に向け検討致しますので遠慮なくお申し出頂ければ幸いです。リセオの学生の訪日も今年も行われる予定ですので、ホームステイに対し会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

また、御宿アミーゴ会の皆さんとの連携強化にも努めて行きますが、まずは昨年取り止めとなったゴルフ会を今年は御宿で是非実現したく、何れご案内致しますので奮ってご参加下さい。

最後に今年も会の活動に対し会員の皆様の暖かいご支援をお願い申し上げますと共に、今年が皆様にとり良い年になりますよう祈念して新年のご挨拶とさせていただきます。



### ＝ 目 次 ＝

1. 新年のご挨拶：上原会長 .....1
2. 新年のご挨拶：ヘレル大使.....2
3. メキシコ・ビジネス事始め：  
「自動車国産化事始め」(山田俊彦会員).....3
4. 第12回総会・懇親会の報告関(事務局) .....6
5. 講演会レジュメ：  
「アリカの虎、マヌエル・ロサダの反乱」(山崎真次講師).....7



## Mensaje de Año Nuevo del Embajador Claude Heller para la Asociación "Amigo-kai"

Enero de 2012

En este año que inicia, quiero desear a la Asociación "Amigo kai" y a sus integrantes mis mejores deseos en todos los ámbitos, además de mucho éxito en los proyectos que lleven a cabo y que redundarán en beneficio de la relación entre nuestros dos países.

2011 ha sido un año de enormes desafíos para Japón. Han sido tiempos de crisis y de dolor pero también de reflexión y de búsqueda de nuevos caminos para un futuro mejor. Japón es un gran país que ha sabido siempre levantarse de las difíciles circunstancias con un espíritu de lucha y de solidaridad. Por ello es admirado en el mundo. Por ello estaremos siempre cerca de ustedes.

Bien sabemos que la amistad entre México y Japon tiene una larga historia y data ya de hace cuatro siglos. Tenemos más de 120 años de relaciones diplomáticas y una historia de intensos intercambios iniciados con la Migración Enomoto a Chiapas en el siglo XIX, y fomentados posteriormente con la instalación de empresas japonesas en México a partir de los años sesentas en el siglo pasado, así como por el creciente intercambio de estudiantes y la colaboración de técnicos mexicanos y japoneses en diversos proyectos de cooperación a lo largo de las últimas décadas.

La continuidad y consistencia de nuestras relaciones hacen cada vez más fuerte la amistad entre nuestras dos naciones. Como resultado de ello cada vez más los japoneses descubren en México, en su gente y en su cultura, algo que les queda para siempre, y de igual manera cada vez más son los mexicanos que descubren en Japón y en las diversas y más ricas facetas de la sociedad japonesa elementos que los enriquecen. Cada vez compartimos también iniciativas que contribuyen al fortalecimiento de los mejores valores de la comunidad internacional.

Amigo-kai juega un papel relevante en la calidad de nuestros vínculos al promover y apoyar conciertos, conferencias, exposiciones, festivales y otras actividades culturales que fomentan el mejor entendimiento de México en Japón. Me congratulo de ello con la certeza de que la Asociación seguirá siendo uno de nuestros mejores aliados en el buen desarrollo de nuestras responsabilidades oficiales en este maravilloso país.

Con mis mejores deseos,

Claude Heller  
Embajador de México en Japón



## メキシコ・日本アミーゴ会 会員の皆様へ 新年のご挨拶

2012年1月  
新しい年の初めに当たり、今年がアミーゴ会と会員の皆様にとって恙なく、更に実行される諸活動が成功し、我々両国の関係に貢献するよう祈念します。

2011年は日本にとって大変な試練の年でした。危機と悲しみの時でした。と同時に過去を振り返ってより良い将来への新しい道を探る時でもありました。日本は闘志と団結の精神で、困難な環境から常に立ち上がって来た偉大なる国です。それ故に日本は世界から敬われ、それ故に我々は常にあなた方の隣人なのです。

我々はメキシコと日本の友好関係が大変長い歴史を持ち、既に4世紀にもなることをよく承知しています。我々は120年以上の外交関係を持ち、19世紀にチアパスへの榎本移民に始った密接な交流の歴史を持っています。そしてこ

の交流はその後も、前世紀の60年代に始った日本企業のメキシコへの進出並びに増え続ける学生の交流と、メキシコと日本の技術者の過去数十年に亘る色々な協力プロジェクトに於ける協働とによって促進されて来ました。

両国の関係は継続し安定しており、このことが時と共に両国間の友好を強めています。その結果として、時と共に日本人はメキシコの国、人、文化に終生忘れ得ぬ何かを見つけていますし、同様に時と共にメキシコ人も日本並びに日本社会の多様で多彩な様相に自らを豊かにする要素を見出しています。また両国は都度、国際共同体の最高の諸価値の強化に貢献する事に率先して手を組んでいます。

アミーゴ会は我々との結びつきの中でコンサート、講演会、展示会、フェスティバル、その他日本に於いてメキシコに対する理解をより深める助けとなる文化的な催しについて優れた役割を果たしています。私はこの素晴らしい国に於いて我々の公的責任を効果的に果たして行く上で、アミーゴ会は我々の最善の仲間の一つであり続ける事を確信しており喜びに絶えません。

敬具

駐日メキシコ合衆国大使  
クロード・ヘレル

【編集部訳】

## 自動車国産化事始め

アミーゴ会会員 山田俊彦

【編集部注：メキシコ進出日系企業はいま、総数 400 社を超える勢いで増加中です。「アミーゴ会だより」は、日本企業のメキシコ・ビジネス草創期に大変な苦労をしながらも、今日の堅固な日墨関係の礎を築かれた諸氏のご経験を『メキシコ・ビジネス事始め』と題して今号より随時連載します。ご期待ください。また「開拓者」としてのご経験をお持ちの会員諸氏のご投稿をお待ちします。】

連載第 1 回はメキシコ日産のお話です。執筆をお願いしました山田俊彦さんは、1969 年まで 3 年余、草創期のメキシコ日産に勤務。その後 69、77、81、82 年と応援のため長期出張。94～96 年には計 5 回、関連会社のメキシコ進出応援のため渡墨。94 年の退職後は新設の駐日メキシコ大使館科学技術部に数年勤務。96～99 年の計 5 回訪墨を含め総計 14 回、延べ約 5 年のメキシコ滞在経験をお持ちです。

## はじめに

2010 年、メキシコ日産の年間自動車生産台数は GM に次いで 2 位の 50 万 6 千台になった。

この原稿は現地生産を始めた頃を思い出して、駐在していた 1969 年末の 3 万台生産迄を記したものです。

当時は FM2 のビザ取得にメキシコ大使館に行くこと、卒業証明書と成績表の提出を求められた時代でした。

メキシコ日産の本社はインスルヘンテス南通りとリオ・チュルプスコ通りとの交差点で、朝 8 時の出勤時でも信号が青なのに車無し。当時はまだそれほど車が少なかった時代でした。



メキシコでは GM、フォードは戦前から組み立てを行い、鋳造設備も持ちエンジンまで生産。メキシコ資本も入ったクライスラー、アメリカンモーターも工場を保有。完成車は欧州有名メーカーの大半が輸入されていたが、62 年の国産化令施行ですべて撤退。フィアットは国営の DINA に売却。新たにルノーが生産。新規参入を認められた VW が生産を開始。最後に日産が進出しました。

着任して間もなくクラシックカークラブの展示会を見に行った。収集家の自慢の車も有るが大半はオーナーが使える様に整備したもので、驚くべきはイスパノサイズを始め超高級車がずらりと並びロールスロイス、パッカーは数知れず、重厚なリムジン、オーナーが運転する 2 ドア、スポーツカー等アウデイトリオ一杯に並べられた名車に言葉もなかった。当時は、一家に車を何台も持てるか一生驢馬しか持てないか、女中を雇うか女中になるか、と言われた頃の末期で、やっと廉価車を買える中産層が増え始めた時代でした。この層の拡大が小型車の販売に寄与する時が近いと、この先の苦労など予測もせず大いに期待しました。

## 自動車国産化令

日産車最初の輸入は 1959 年に輸入組立販売の為に現地資本で Automobiles Nissan de Mexico S.A.(ANM)を設立し、60～61 年に完成車 210 型 1,596 台を輸入した。

62 年の国産化令で許可を得て製造する為に、100%外資の Nissan Mexicana S.A.の設立を計画したが、会社は出来ても商工省は既存の ANM 社の輸入組立の権利を継承しなければ許可を出さないという。しかし、ANM 社のパートナーは本業の映画の採算悪化で倒産寸前。この権利を如何に高く売りつけるか長年にわたる係争が続くが、本題では無いので省略します。

メキシコ日産の工場完成までの暫定処置として、その間に組立てを許されたが、工場を持たないので VAMSA (アメリカンモーター)の工場にタイヤ、バッテリー等僅かな国産部品で組立生産を委託し、62～64 年に計 5,899 台販売した。この時の乗用車は現在も時折見掛ける初代ブルーバード 310 型であった。



国産化令とは 62 年に公布された、外貨不足のメキシコが完成車の輸入を禁止し、65 年以降は国産化率 60%以上で無ければ生産を認めず、更に生産台数を割当制とするものである。

注：生産割当台数 1967 年 12,200 台 日産 8,000 台  
1968 年 16,300 台 日産 9,000 台

国産化率は製造原価の 60%であるが、これが曲者で雇字搦めの制約が付いて居た。例えば、パワートレイン(駆動機構)、すなわちエンジン、ミッション、アクスル、車輪は国産品である事。自動車メーカーの新規部品内製は禁止。しかし昔から生産していた米系メーカーは既得権で継承出来た。部品メーカーへの新規外国資本参加は不許可。他方、既存の米系メーカーには減税の恩典まであった。

国産化令の目的は単に外貨の流出を防ぐだけでなく、国産化の義務付けによって自国の産業を成長させることが目的だが、恩恵を被るのは既存のメーカーで有って新規参入は難しかった。また下記に列記するように、外資の自動車メーカーには利益還元出来ない様な利益圧迫政策があった。

- ・生産台数：割当制で決まった台数しか生産できない。これも既得権で先入者が有利。
- ・販売価格：本国価格の乗用車は 160%、トラックは 120%を目安に政府が決める。例えば、ブルーバード 510 型の認可価格は 28,000 ペソ(US\$=12.5 ペソ、US\$=360 円。日本国内価格相当)。
- ・部品価格：日本の価格の平均 1.5 倍以上で、経営上最大の問題であった。
- ・利益送金：とても利益を出す経営状態で無かったが、これにも制約があった。
- ・人件費：労務者の賃金は確かに安かったが、ホワイトカラーはむしろ日本より高い位であった。
- ・納期：部品メーカーが少なく、1 社独占も多く、最後に進出した日産にまで品物は廻って来ない。
- ・小型：多くのメーカーは米系で、小型部品の製造に適さない。VW 向けの独系メーカーは数社。

・価格：競争が無いので相手の言うなり放題。値上げを受け入れないと直ちに納入ストップ。

・品質：言うべくもなく粗悪でばらつきが多く、大きな生産阻害要因になっていた。国産化令が出た時にベンツは「この国の部品で信頼できる車は出来ない」と捨て台詞を残し撤退。現在まで乗用車は国産していない。

・技術提携：まともな部品を製造しているメーカーの殆どは米国の、また数社がドイツの技術提携を受けていた。日本は唯一「三ツ星ベルト」が進出したが、IUSAの傘下に入り技術者が一人残留して幹部となって居た。

・部品供給：部品メーカーへの出資が不許可になる以前から、全て補修部品の米系大手メーカー複数が生産し供給能力も有った。例えばピストン、リング、バルブ、ショックアブソーバー、スパークプラグ、ガスケット、ベルト、バネ等。

この様な環境の中で 66年4月、ブルーバード410型の生産が完成したクエルナバカ工場が始まった。エンジンは内製が許可されたが、国産品のない鍛造



のコンロッド、リングギアは輸入した。66年に1,339台、67年に6,642台を生産。同工場は敷地40万㎡、建屋2.8万㎡。完成式に日本から出席した社長が「何でこんな立派



な工場を建てた。木造で十分だ」と激怒したが、整地の際に出た溶岩でより安く出来たとは誰も口にしなかった。設計はカミノリアルで有名な Ricardo Legorreta と最近に判った。

### 購買マンの事始め

今回は担当していた購買の眼を通して、当時の状況の思い出した事を記して見ます。

乗用車メーカーの最後に進出した日産は、生産能力を上回る受注を謳歌して居る部品メーカーからとてもまともな納入は望めなかった。受注を断られ、時期が来たら発注したいからと見積を頼むと法外な見積料を請求された事もあった。製品を工場まで納入するのは市場で競争のあるタイヤとバッテリー会社のみ。部品は全て購買部が持つ運輸課のトラックが毎日引き取りに行くが、時間通りには出来て居ない。部品メーカーの人が来社するのは値上げ要求の時のみで、すべて当方から出向いて交渉する。購買部に応接室など無かった。

電話はメキシコ市内は何とか繋がったが、クエルナバカには電話局交換で2、3時間は掛った。日本には半日待ちで、料金はとても私用に使える値段では無かった。ファックスは未だ無く、唯一の本社との通信手段はローマ字のテレックスのみ。お蔭で本社の余計な干渉も無く、自由に存分な仕事が出来たのは幸いでした。

### 特に調達困難だった部品

鋳物：シリンダーブロック、ヘッド等、量産で連続して鋳造する設備が殆ど無く、数年前に進出したが経営に行き詰まり国営化されて SIDENA となった元豊田自動織機の工場から購入した。米系メーカーは鋳造工場を既に保有していたので問題なし。VWはエンジン、ミッシ

ョン、アクスルが一体構造なので国産で対応出来るメーカーが無く、ボデーのプレスを国産化する事と交換で内製許可を取得した。

SIDENA は織機のフレームを鋳造する為の設備を有していたが、中子を必要とする肉薄のエンジン鋳造の経験は無く、半分はオシカで、そのまた半分は水漏れと、とても必要な数は確保出来ない。本社の鋳造専門家を何人も技術指導に派遣して貰い少しずつ歩留まりを上げていったが、専門家が帰国すると直ぐに元通りとなる。しかも隣の国営 DINA で生産しているルノーのエンジンと取り合い合戦。SIDENA の生産主任と仲良くなり、夜中にテキーラと塩鱈を持って金型交換をさせて、こっそり作らせたりもした。この状態はメキシコ州のレルマに自家鋳造工場が認可される迄十数年続いた。



リアアクスル：米国の DANA スパイサーの子会社が VW、ルノーを除いた全車に供給。急激な増産に間に合うべくもなく一か月も納入が無い状態が常であった。製品も仕様に合う様な小型軽量の専用品は作らず、同社の規格部品の寄せ集めで何とか使える物を生産させたが、重く性能にも影響が出た。

余りにも酷いので、ある日完成しないで野晒しになったトラックの写真を持って行き抗議すると、どの顧客も同じ状況と言いつつ「日産の競争相手は小型でアクスルの無い VW とルノーだ。このままでは惨敗する」と言うと、そこは情に脆いメキシコ人。直ぐに有る程度の品が入って来た。



### !!モデルチェンジ!!

この様な状況の中で生産開始後2年、410型は1万台しか生産されなかったにも係わらず、68年オリンピックに合わせて画期的な新車510型にモデルチェンジすることになった。

新型車は4輪独立懸架で、リアアクスルはスパイサーでは生産出来ない複雑精密な構造で、当然断られる。これを期待して輸入を



申請したが、駆動系の輸入は許可しないとの一線を破れなかった。日本のワゴンも旧型と同じ形のアクスルで幸いにフロアーの寸法は乗用車と同じなので、メキシコ専用のボデーのみ同じで足回りはワゴンの異形のモデルが出来上がった。

トランスミッション：米国 Clark の子会社トレメックのみが生産。ここも同社の規格品の改造限度のものしか供給しない。やむを得ずジープの3段ミッションを検討。これも大きすぎて何ともならず。暫くして再三の交渉の結果、SIDENA で国産化させる許可を入手。アルミ鋳物のケースに当初は日本から歯車を輸入して組み立てた。

有るとき突然、歯車の輸入許可が下りなくなった。ト

レメックが異議を申立て、歯車を生産しているからこれに替えろとの事であった。工場に設備を見に行くと、全部米国製の吋サイズのダイアメトラルピッチの機械で、切削工具を取り換えればメートルサイズのモジュールも出来ない事は無いが無理が多すぎ、散々折衝の末に諦めさせた。

この時の強烈な交渉相手が 92 年に関連会社の工場建設で交渉に当たったケレタロ州工業振興局長になっていて、「あの時は自分の立場があったが、今度はお客だ」と全ての書類を出したら、直ぐに許可すると土地の購入から工場建設の許可まで一か月でやって呉れた。法律事務所から最短記録と言われ、多分今でも記録は破られて無いと思う。メキシコならではの良かった話です。

ガラス：モンテレーグループが日本では未だ稼働していない最新の英国ピルキントン社のフロートガラスの設備を持ち、薄板の供給能力と品質は十分にあったが問題は曲げ加工である。普段から遅延の連続だった所に、オリンピックに合わせて名車 510 型にモデルチェンジをしたが、この車からサイドガラスは曲面になった。米車には既に採用され全車同じ曲率の R なので能率的な大きな設備を備えていたが、日本の R には合わずプレスで一枚ずつ曲げるので間に合う筈がなく常に欠品。

悪どいメーカーも数多く不良品を混ぜて納入する。返品しても止まないのペンキを塗って返却したら、器物損壊で訴えてきた。確かに検収が終わって無いので所有権は相手側に有り、文句が言えない。このメーカーはペンキを剥がして堂々と補修品として販売していた。

補修部品 国産出来る部品はすべて輸入禁止。

### 網渡りも今は昔

部品の問題は枚挙を厭わないがこの位にして、話題を周辺事情に転じます。

輸出：中南米自由貿易協定でこの圏内の部品は国産化率に計上出来たが、輸入する国も外貨が無いので同額の輸出を必要にした。チリ日産の国産化率が達成しないので、メキシコからエンジンを輸出、バーターとしてラジエター、ロードホイール、コイルスプリングを購入した。

鉄鋼：メキシコの当時の粗鋼生産は年 300 万トンで、1,000 万トンの国は自動車为国産出来ると言われた時代。鋼板を直接購入する事は無かったが、部品メーカーが使用していた。鋼板メーカーは Hylsa 社。勿論ボデー外板は生産不可能。トラックのフレームに使用したが問題は無かった。トラックの荷台は事務家具メーカーの D ナショナルから購入した。この Hylsa 工場で昼食時、圧延の最終工程でトルティーヤを素早く器用に流れ作業で焼いていたのには笑ってしまった。他人ごとでは無く、吾が工場でも車の床を溶接のトーチランプで熱して同じことをやって居た輩が居たそうです。

アルミ：製錬メーカーは無くインゴットの輸入。再生材はマーケットが確立せず入手難。

銅：鉱山は沢山あったが、伸銅技術が低く、重いラジエターとなった。

輸送：未だコンテナの無い時代で、毎月 2 船、木箱の CKD 部品を満載した船で輸送されてきた。陸揚港のアカプルコの港湾ストが度々で、何か月にも



及ぶ事が屢あった。通関書類を携え週 2 便の DC 3 でマンサニョーに行き、隔日のスイス製寝台車でガダラハラ経由で戻って来た。港が一杯で降ろし切れないと、マサトランまで運び陸揚げした。

新車の 510 型は部品の欠品が続く中で 68 年のメキシコオリンピックに間に合い、委員会や選手団に大量に貸し出し目立つ存在となって、モデルチェンジは大成功。日産車の評価は一挙に高まり、その後の確固たる地位を築く地盤となった。もっとも部品が揃わず、旧型 400 台



の完成を後回しにしての苦しい決断も有ったが、難なく売り捌けたのも割当制の生産台数のお蔭である。

チューブスタイヤ、安全ベルトは日本より

も採用が早かった。

従業員との関係は、慣れない日本流の仕事に戸惑いながらもメキシコ人は非常に良く働き、楽しく業務を進められたのは何よりであった。中には仕事が出来ず解雇する事も有ったが、理由を告げると素直に認め、会社は去るがアミゴの関係は今まで通りにして欲しいと言われ、目頭が熱くなった。工場に組合が出来て生産に支障を来す様になるのは大分経てからの事です。

こんな状況は 20 年近くも一向に改善されず、苦しい経営状況が続いた。

日本の部品メーカー進出：出資が認められずに技術供与だけで魅力が無く、本格的に進出を始めたのはアグアスカリエンテス工場が完成した 90 年初期からで、今や殆どの主要部品が日系メーカーから調達出来る時代となっている。正に隔世の感とはこの事で感無量。往時の苦労話など信じられないと思います。

今や NAFTA により全てが自由化されて国産化令で新規参入が無かった時代は終わりを告げ、世界各国の車が輸入され、また外資で工場が建設される時代となって新たな競争が始まった

このような困難な時代に訳も分からず何とか仕事が出来たのは、すべて配下に優秀なメキシコ人が多数が居たからに他ならない。今もって何人かと交流を保っているのはこの上なく嬉しい限りです。

仕事では問題山積でしたが、日常生活は快適そのもの。味噌醤油が手に入らないこと以外に不便は感じられませんでした。

メキシコでは何処にもあったファーストフードは、帰国した翌年の 70 年に日本で初めてのマクドナルドが銀座に開店した。その位進んでいた面も多々ありました

良き時代に駐在を経験し、その後の生活にも良い影響を与えた事に感謝する次第です。(2011 年 12 月記)

【編集部注】山田さんも「隔世の感」「感無量」と記されていますが、2011 年のメキシコの自動車(乗用車)生産台数は 255 万 7,550 台と過去最高となり、メキシコ日産の生産台数も 60 万 7,087 台と GM を抜き第 1 位(23.7%)を記録しました(AMIA 墨自動車工業会発表)。なお、山田さんはメキシコの思い出深い写真を「CAFÉ MÉXICO」の下記ウェブに多数展示されています。併せてご覧ください。

☆URL: [http://www.cafe-mexico.com/alacarta/frameset\\_yamada.html](http://www.cafe-mexico.com/alacarta/frameset_yamada.html)



## 第12回 総会・懇親会の報告

事務局長 関口 重雄

恒例のメキシコ・日本アミーゴ会の総会・懇親会が11月7日(月)18:30より、銀座 Zest Cantina(メキシコ料理店)で開催されました。新任の駐日メキシコ大使クロード・ヘレル閣下ご夫妻、御宿アミーゴ会会長貝塚氏はじめ会員約70名が参加され、メキシコ料理、テキーラ、音楽を楽しみ、盛会裏に終了しました。島田明彦会員よりご自身のサボテン園(前橋)から可愛いサボテンをご寄贈賜り、出席者全員に配布しました。改めて御礼申し上げます。

おかげさまで会員の皆様のご支援のもと各種行事が行われ、日墨友好親善の実を挙げる事が出来ました。これも偏に会員の皆様のご支援のおかげと感謝しております。総会にて上原会長より下記の通り、当会、アミーゴ会西日本地区、御宿アミーゴ会等の活動実績および新年度活動計画、幹事選任、会計報告がなされ、全て承認されました。引き続き、鴻巣幹事の司会により懇親会が開催され、ヘレル新大使からのご挨拶、会員間では駐在時代の思い出話やメキシコ関係の情報交換等が行われ、メキシコ料理に舌鼓を打ち、コロナビール、テキーラを楽しみ、和気藹々のうちに懇親会を終了いたしました。以下、総会議題にしたがい概要を報告します。

### 総会議題

#### I.平成22年度(H22/9-H23/8)活動報告

- アレグリアメヒコ(横浜)とフィエスタメキシカーナ(お台場)の後援および人的支援
- メキシコ歴史文化講演会：4回開催
- アミーゴ会西日本地区懇親会、エミリオモラレス氏の演奏会、京都エルマノス会との交流他
- 御宿アミーゴ会の主要活動：
  - 会員訪墨：ドンロドリゴ生誕地往訪、墓所参拝
  - コンサート開催：黒沼ユリ子他
  - ドンロドリゴマラソン大会の開催
- 『アミーゴ会だより』の発行(季刊;No.5~8)
- 講演会、音楽界、展覧会、映画界、行事等のメルマガ配信およびホームページ掲載。配信掲載：年約60回。
- メキシコ進出企業等の照会、相談、貿易相談およびマスコミ・会員からの照会に回答。留学相談等の助言。
- 親善ゴルフ大会およびリセオホームステイは中止(東日本大震災および原発事故を考慮)

#### II.会員状況

総会員数 283名；御宿 17名；海外会員若干名

#### III.幹事選任(敬称略、順不同)

会長：上原 尚剛、副会長：玉置 修一郎、櫻田 武  
 幹事：(東京地区 14名)石井あけみ、市井勇人、伊藤勇、大石正樹、河嶋正之、鴻巣勝明、酒田健治、下條宗男、瀬下直昭、高山智博、中嶋 誠、南郷茂伸、日笠 徹、森 和重;(関西地区 9名)市川啓一、伊藤宜則、大熊康雄、奥西保彦、小茂田一希、鹿内竣一、出雲良治、葎谷 修、渡辺正明;(メキシコ代表 1名)遠藤滋哉

#### IV.22年度決算報告(別表参照)

#### V.23年度(H23/9-H24/8)活動計画

- アレグリアメヒコ、フィエスタメキシカーナ等幹事の後援・協力
- アミーゴ会西日本地区：京都エルマノス会等西日本地区に有るメキシコ関係団体との交流
- 御宿アミーゴ会：メキシコ小学生のホームステイ、黒沼ユリ子コンサート、第二次訪墨団、東京の会員と親善ゴルフ大会等交流促進、メキシコ関連講演会(予定)
- メキシコ関連ビジネス広告協力
- 22年度行事・活動の継続
  - 歴史文化講演会、親睦ゴルフ、リセオホームステイ、メキシコ進出企業助言、アミーゴ会だより発行、メルマガ配信、ホームページ掲載、各種問い合わせ回答

#### 6.事務局機能強化

#### VI.懇親会(司会：鴻巣幹事)

挨拶：上原会長

来賓挨拶：駐日メキシコ大使クロード・ヘレル閣下

乾杯：玉置副会長

#### (別表)平成22年度会計報告(H22/9/1-H23/8/31)

収入	金額(円)	口数	昨年
会費収入 銀行	528,000	176	167
郵貯	135,000	45	46
御宿	45,000	15	18
小計	708,000	236	231
総会参加費	355,000		
講演会収入	26,150		
広告料	18,000		
CD陶板収入	4,200		
釣銭等仮払戻入れ	59,000		
ゴルフ交流会戻入れ	1,000		
その他	5,189		
<b>収入計</b>	<b>1,176,539</b>		

支出	金額(円)	
行事費・総会	320,025	(会場費 300,000)
行事費・講演会	144,285	講師謝礼
通信費・郵便料	68,945	
通信費・電話料	46,389	
事務費・コピー代	40,182	アミーゴ会便り
事務費・HP費	12,600	
交通費	26,930	西日本地区等
幹事会(東京)	68,840	
幹事会(大阪)	20,000	
日墨交流史	17,080	書籍購入
ゴルフ交流会補助	50,000	
大使餞別	53,500	
仮払金・釣銭	50,000	
振り込み手数料	3,675	
<b>支出計</b>	<b>922,451</b>	

☆収入-支出 254,088円 (22年度純増額)

☆前期繰越額 1,727,563円

☆当期繰越額 1,981,651円

☆監査役 南郷茂伸(署名捺印)

以上

## 「アリカの虎、マヌエル・ロサダの反乱」

講師 山崎眞次

メキシコ歴史文化講演会の第4回講演会を去る9月22日、早稲田大学政治経済学院教授の山崎眞次先生を講師にお迎えして、19世紀中葉のハリスコ州で続発した大規模な農民反乱の指導者である「インディオ農民ロサダの大義—農地改革の先駆者」についてご講演いただきました。本稿は担当の森幹事のお骨折りで、山崎講師自らご執筆をいただきました。記してお礼を申し上げます(編集部)。

### はじめに

19世紀中葉、メキシコの中西部に位置するハリスコ州で大規模な農民反乱が続発した。反乱の指導者マヌエル・ロサダは、州都のグアダハラから北西へ200キロ離れたテピック(現在のナヤリ州)の東部山岳地帯、アリカを活動拠点にして、州政府軍を翻弄した。

ロサダに関しては盗賊、無法者、殺人者といった悪のイメージが長く纏わりつき、ハリスコ州の支配階級の間での評判は芳しくなかった。「虎」というあだ名は彼の抵抗に手を焼いた自由主義を標榜する政治家や企業家の意を受けて、ジャーナリストがロサダの残忍性を表象しようと命名したものである。

しかし、フランス軍と保守主義者のロサダ観はまったく異なる。ナポレオン3世は、メキシコ支配のために送り込んだオーストリア・ハプスブルグ家のマキシミアン大公への貢献を評価し、この農民にレジオンドヌールを授与している。ファレスやセバスティアン・レルドの政敵であったポルフィリオ・ディアスは将軍職就任をロサダに懇願している。また、保守派と同盟したテピック在住の外国人貿易商たちは、ロサダに武器弾薬を気前よく供与している。一方、農民たちは圧制に苦しむ民のために権力に抵抗した義賊と称え、ロサダ軍へ勇んで参加した。エリック・ホブズボームの「匪賊の社会史」に登場するロビン・フッドのメキシコ版ともいえる。

自由主義者にとっては獰猛な「虎」であっても、農民や保守派や外国人貿易商にとっては頼りがいのある「虎」であった。

### マヌエル・ロサダの生涯

ロサダは1828年9月22日、テピック近郊の村、サンルイスで生まれた。貧しい少年は、近郊のアシエンダ、



モハラスで牛追いとして働き始めた。そのうち追われる身となり、1851年には、「アリカの盗賊団」と呼ばれ、悪名を馳せるようになる。

彼が一躍有名となったのは、1857年9月にモハラスとプガという二つのアシエンダを襲撃したことであろう。それまでの小規

模で散発的な襲撃と違い、地域を象徴する重要な農園を襲撃したことは、地域の支配

者と権威に対する反逆であった。この事件以降、ロサダの襲撃は権威に楯突く略奪行為から民衆、特にインディオ農民を守る正義の戦いという社会性を帯びてくる。

ハリスコのインディオ農民が中央政府や州政府に激しく抵抗する理由は、1856年6月25日に制定された「永代所有財産解体法」、通称、レルド法である。この法律の骨子は、教会や先住民共有地のような法人所有の不動産を売却し、その所有を禁止することである。

ロサダが州政府軍と対等以上に闘うことができた背景には、彼を経済的、軍事的に支援するテピックの外国人の貿易商がいたからである。アイルランド人のバロンとスコットランド人のフォーブスはテピックにバロン・フォーブス社を設立し、メキシコ西海岸の貿易を牛耳った。彼ら外国人商人は保守派と連携し、自由主義派と敵対した。レルド法を制定した自由主義派を敵視するロサダと、密貿易を厳しく取り締まる自由主義派に反発するバロン・フォーブス社とは、お互いの利害が一致し手を結ぶことになったのである。

レフォルマ戦争はファレス軍が1860年11月、保守派の軍隊を打ち破り終息した。そしてまさに共和国が安定し、発展の途についたとき、1862年、フランス軍が干渉してきたのである。保守派に招かれたマキシミアン皇帝とロサダの間には、自由主義派を共通の敵とする共同戦線が1863年に成立した。メキシコ西部に進駐したフランス軍は同盟の見返りにロサダ軍に軍資金と軍需物資を提供した。しかし、戦況は次第に仏軍に不利となり、マキシミアンは1867年、処刑された。同年8月7日、ベニト・ファレスは共和国に軍事的に帰属し、ハリスコ州から行政的に分離した第7管区(テピック)を承認した。ファレスはロサダの軍事力を利用して地方分権化を抑止しようとしたのである。

ロサダは1868年12月、「境界設置委員会」を設置し、アシエンダとの土地係争を抱えるインディオ農民たちに土地の分配を開始した。この措置に対して、グアダハラの特権階級は猛烈に反発し、新聞紙上で個人の所有権を否定するロサダを非難した。1872年、ファレスの急死によって、ロサダは孤立することになる。後継者のセバスティアン・レルド・デ・テハダは、中央集権主義



を掲げ、各地の農民反乱の鎮圧に乗り出した。恩赦を求めるロサダには無条件降服を命じ、さらに「境界設置委員会」の裁定を無効にしたためにロサダは反発し、戦闘が再開された。

ロサダはテピックのインディオ農民が中央政府に対して闘う大義を1873年1月7日「解放計画」で表明し、その中で中央集権主義、議会の腐敗、統治者の低い倫理観を非難した。そして、1873年1月、ロサダは乾坤一擲、勝負を決すべく活動拠点のアリカ山地を離れ、州都グアダハラハラ攻撃に向かった。兵員数では勝ったものの、山岳のゲリラ戦ではなく平地での正攻法ではラモン・コロナが率いる州政府軍に分があり、28日、ラモホネラで大敗した。その後、アリカ山地で追い詰められ、7月14日に捕縛され、19日、テピックのロス・メタテス丘で銃殺された。

### 永代所有財産解体法

「永代所有財産解体法」(レルド法)は35条からなり、序文で、「国家の繁栄と発展を阻害する最大のものの一つは、公共財の基礎である不動産の大半(の売買)が停滞して、自由に流通していないことである」と謳われた。自由主義経済にそぐわない法人の非生産的な不動産の流動化が制定の目的であった。

イギリスやフランスを近代国家の手本とする自由主義者にとっては、教会も先住民共同体もスペイン植民地時代の悪しき負の遺産であった。教会はその膨大な土地を近隣農民に貸しつけ、耕作させ、収穫の一部を賃料として徴収していたが、彼らの経営感覚は封建的なもので、資本主義的視点は乏しかった。教会が一部の例外を除き、零細農民に過酷な賃料や物納を課さなかったのは、信者の生活を守るという慈悲や寛容という宗教心が働いたからである。それに対して、私有のアシエンダで労働するペオン(小作人)の待遇は教会所有の農園で働くペオンより劣悪で、アシエンダの増加・拡大はペオンの労働条件を悪化させる原因ともなった。

教会には弱者を救済するという宗教人としての考え方が働いており、利益至上主義のアセンダド(大農園主)とは自ずから農民に対する接し方が異なった。その結果、信心深い農民のなかには良心の呵責や破門への恐れから敢えて教会の土地の私有化を申し出なかった者も多かった。農民が土地取得を躊躇しているうちに、アセンダドや企業家が競売で土地を掠め取っていったのである。

農民の怒りがレルド法に向けられたのは自然の成り行きであった。自由主義派はレルド法を制定したことによって、教会を敵に回すと同時に教会と零細農民の連帯も生みだした。農民に残された道は二つしかなかった。新しいアセンダドの下で、ペオンとして惨めに働くか、果敢に反乱するかである。テピックで後者を選ぶ農民が



少なくなかったのはロサダの存在が大きかった。ロサダロサダの傘下に参集したのは、アリカ山地の先住民、コウラ族やウイチョル族と、テピック低地の教会や大農園の土地を耕作していた非インディオのメスティソの農民たちであった。彼らを中核とした農民軍に、各々の思惑と打算を抱えた軍人、政治家、識者など多様な人々が加わった。レルド法は、為政者の思惑に反し、皮肉にもロサダの存在を民衆、特に零細インディオ農民に認知させ、彼への支持を拡大させる大きな契機になった法律とも言える。

### 結語

自由主義者やアセンダドはロサダを極端に恐れていた。「アリカの虎」というあだ名は彼らの恐怖を端的に表している。だが「虎」と命名したのは恐れだけからではない。ロサダの敵対者は自ら恐れる以上に、民衆を恐れさせようとした。ロサダを強欲な略奪者や冷酷無比な殺人者に仕立て上げて、彼に対する反感を募らせ、ロサダの武装蜂起を大義なき無法な騒乱に貶めようと画策した。新聞社は社主や後援者である権力者の意向を受け、大々的に反ロサダのプロパガンダを展開した。一方、ロサダは自己主張や自己弁護できる手段を持たず、一方的に指弾されるばかりであった。19世紀半ばに捏造されたロサダの負のイメージは歴史書や伝説で語り継がれ、20世紀末においてさえ消えることはなかった。ロサダ研究の遅れも、彼への偏見がハリスコ州やナヤリ州で根強かったせいである。別言すれば、それほどまでにロサダへの中傷は激しかったのである。

しかし、徒にロサダを英雄視したり神格化することは慎まなければならない。貧しさや不当な迫害が原因とはいえ、青年期から草族団に加わり、略奪、殺人を犯した無法者であったのは事実である。だが、ロサダが他の盗賊と異なるのは、盗賊行為を社会運動に昇華したことである。サンルイスの先住民共有地がモハラス・アシエンダによって不当にも侵害され、土地が強奪されていくのを看過できなかった。その意味ではロサダは盗賊というより匪賊であった。ホブズボームが指摘しているように、「匪賊とは、農民社会の中に留まり、人々によって英雄、あるいは復讐者、あるいは正義のために闘う人、あるいは解放の指導者とさえ考えられており、強烈な個性と軍事的才能を持った強情で自ら恃むところのリーダーである」。

ロサダはテピック特例軍区の承認後、境界設定委員会を設置し積極的に農民に土地を分配し、農民による地域支配を確立した。自律的農民共同体を創生した功績を評価すれば、農地改革者という名に値するである。ロサダはロサダは20世紀初頭にメキシコ革命で農地改革を推進したエミリアノ・サパタの先達者と見なすことができる。(了)

### ＝ 編集後記 ＝

寒中お見舞い申し上げます。早いもので時候の挨拶が謹賀新年から変わりました。おかげさまで四季報の本誌も第9号となり、創刊3年目に入ります。2012年は「壬辰」(みずのえ・たつ)。水に育まれた草木の種子が陽気を受けて伸張する様を表すとか。また、昇龍にあやかり力強い新天地再構築に向けた一年としたいものです。ご壮健をお祈りします。今号から新シリーズ『メキシコ・ビジネス事始め』をはじめました。会員の皆様はメキシコでのお仕事の草創期に経験された「歴史」をお寄せ下さい。なお『私の本棚』は都合により休載しました。【か20120122】